Japan Society of Obstetrics and Gynecology

415　子宮腺筋症におけるLewisY抗原の発現

関西医大
越川園子、梅嵜圭吾、実積真由美、中嶋達也、
岡田英孝、金森文江、松原高史、安田勝彦、
神崎秀陽

［目的］ 子宮腺筋症と正所性の子宮内膜との関連性は、その発症機序ともかかわり興味深いが未だに不明な点が多い。今回、糖鎖抗原の一つであるLewisY抗原を用いて、子宮腺筋症とその同一症例の正所性内膜の月経周期、閉経に伴う変化の解析を試みた。 ［方法］ 当科にて子宮全摘術を施行し、子宮腺筋症を合併している分泌期9例、増殖期8例、閉経期5例を対象とし、一次抗体にLewisY抗体を用いストレプトアビジンビオチン法にて免疫組織学的に検討した。 ［成績］ LewisYの発現は正所性内膜においては、増殖期では腺のcytoplasmに発現がみとめられ、分泌期ではその発現はほとんどみとめられなかった。また閉経期では腺のapicalに発現がみとめられた。一方、腺筋症の部位では、増殖期、分泌期、閉経期のいずれにおいても腺のcytoplasmにLewisYの強い発現があり、各周期による差はみとめられなかった。 ［結論］ LewisYは正所性の内膜腺では周期に特徴的に発現していたが、子宮腺筋症においては月経周期に関係なく強い発現がみられた。LewisY抗原は、stage specific enbryonal antigen、cancer associated antigenとしてしられ、細胞増殖あるいは腫瘍化に関連することが報告されている。腺筋症においてこの抗原が常時発現しているという今回の結果は、この病態が正所性の子宮内膜とは異なり、腫瘍的性格を有する可能性を強く示唆している。

416　子宮筋腫自然増大の予知
-針生検標本を用いた検討-

大阪市大
市村友季、川村直樹、伊藤文博、柴田幸子、
石河　修、梅咲直彦、荻田幸雄

【目的】子宮筋腫は卵巣ホルモン依存性に増大する良性腫瘍であるが、その増大速度は症例によって異なる。今回、針生検によって採取された筋腫組織に種々の解析を加え、その後の筋腫増大と関連する因子について検討することを目的とした。
【方法】腫瘤触知以外無症候性の子宮筋腫を有し経過観察を希望した、規則的な月経周期を有する患者30名を対象とし、ＭＲＩにて5～20ヵ月間の子宮筋腫の自然増大率を計測した。初回ＭＲＩ撮影後、腫瘍に悪性性格のないことを確認するため経子宮頚管的に筋腫様腫瘤の針生検を施行し、病理組織学的に usual leiomyoma と診断された標本に対して、ＨＥ染色、Azan染色、免疫染色を行い、細胞密度、硝子変性の程度、平滑筋細胞比率、estrogen および progesterone receptor（ＥＲ、ＰＲ）の発現強度を半定量的に評価し、子宮筋腫増大率との相関性について検討した。
【成績】通常月経周期を有する患者の子宮筋腫の増大率は、年平均26％（範囲：-49％～326％）であった。子宮筋腫増大率と硝子変性の程度、平滑筋細胞比率との間には、推計学的に有意でないものの相関傾向（r=-0.37：r=0.09、r=0.34：p=0.08、r：Spearman順位相関係数）が認められた。しかし、細胞密度、ＥＲ・PR発現強度とは相関はみられなかった。
【結論】生検標本を用いることにより、悪性の有無の評価はもとより、種々の解析をくわえることで、筋腫増大の予測に関する方法論の確立の手がかりがえられた。

NII-Electronic Library Service